

序

この度、長期にわたる東京大學總合圖書館所藏漢籍の再整理が終了し、冊子體目錄を刊行する運びとなりました。ここにその完成を悦び、一言御挨拶申し上げます。

周知のように、本館は大正十二年の關東大地震に罹災し、建物は言うに及ばず、藏書にも甚大な損害を被りました。書庫内に今なお存する焼残り本を見るにつけ、無慘な思いに捉われてなりません。しかし復興もいちはやく、翌年には南葵文庫・廣東籌賑日災總會を始めとする多くの篤志家からの寄贈の申し出が相次ぎ、藏書は舊にも倍して豊かとなりました。これら義捐の書籍を中心として形成されたのが本館に儲藏される漢籍であり、その數はおよそ一萬點に上ります。

他の圖書と同様、漢籍についてもカード目錄は從來より本館一階の目錄參考室に備えられ、それなりの役割を果たして参りました。しかしながら、誤りや不備が目立ち、一刻も早い改善を望まれていたのも事實であります。

昭和五十八年、ようやくその機が熟し、四月、掛員三名を擁する古資料目錄掛を設置、併せて戸川芳郎文學部教授・山本仁文部省教科書調査官を主とする漢籍目錄編輯委員會を組織し、作業に着手致しました。この作業は既存のカードを利用するのではなく、一から取り直し、中國の傳統的な圖書分類である四部分類法を採用するというものであります。爾來十有二年、幾多の紆餘曲折を経ながらも、館員と編輯諸氏の勞劬により難局を克服

し、この三月、竣工を迎えました。これを以て、本館に惜しみなく援助をし続けられた先賢各位の御芳志に對し、多少なりとも御恩返しが出来たとの感を深くしております。また、この間、本事業に寄せられた様との貴重な御意見や御助言も忘れ得ぬものであります。

わが國の文化にとって、漢字文化の持つ重みには測り知れないものがございます。文字・言語はもとより、思想・宗教・文藝に及ぶ迄、漢字文化は、日本の文化に廣く且つ深く滲透致しました。特に江戸時代に於ては日本人の精神生活の中樞に位置したと言っても過言ではありません。そのことが膨大な量の中國書の舶載と、以前とは比較にならぬ程の和刻本の盛行を産む基となつたのであります。緋いて見れば御判りのように、本書にも實に多種多様な和刻本が著録されております。

しかるに近代以來、漢文學の衰退と共に漢字文献たる漢籍は殆んど放置され、僅かな専門家によつてのみ辛うじて保護されて参りました。現在、日本各地の圖書館や神社・佛閣には許多の漢籍がいまだに眠った儘であります。それらを發掘し後世に伝える努力は早急になされねばならず、もし本書の刊行がその一助ともなるならば、これに勝る喜びはありません。とは言え、本書にもなお缺陷のあることは充分に豫想されます。大いに活用されることを望みつつ同時に御批正を仰ぐ次第でございます。

なお、次の段階として、本館に於ては本書のデータベース化を検討中であることを附記して置きます。

最後となりましたが、館員・編輯委員以外にも、本書の編纂にお力添え下さった方がた―その仕事は、叢書の子目採取であつたり、索引作成の手傳いであつたり、何度もの校正であつたり、と各様ですが―にたいし厚く御禮申し上げます。また、諸本の校合に際して積極的に便宜を圖られた京都大學人文科學研究所を始めとする漢籍

所藏機關、刊行に當たつて御盡力下さつた文部省學術國際局學術情報課に對しても滿腔より感謝の意を捧げるものでございます。

平成七年三月

東京大學附屬圖書館長 開原成允